

様

住岡狂風

大波小波、

見よ、生滅の波！

消えては立ち、立ちては消える。

大きき波、小さき波

大ききも消え

小さきも失せ

消えて、失せて、止まることなけれど

波は水に

水は波に

波は死ぬ、死ぬは波

そうだ。私は死ぬる！

けれど、私は死なぬ！

□ 大正九年も暮れそうになって来ました。何だか大きなものを失った様な寂しさと、何か果した様な空虚を感じました。

私は「二十二号」それだけで、噫と、何とも言えない涙が湧きます。

苦しさと、忙しさと、辛さと、心細さと、愛と、感謝と、感激との間に立つて、大正七年の暮から一時の間も忘れ得ないで、作ってきました。苦しさと、うれしさをほんとは味わってきました。

□ 光明を活字にしたい。けれど、部数の少ない今、金のない私にはとても出来ません。五年でも七年でも私たちの団体が育った時、私の望みは出来あがる。不完全な謄写器では兄弟たちにすみません。先日、新しい機械を大枚三十数万円奮発して注文しておきました。新年からは、よくわかるのを差し上げることが出来るでしょう。

□ 忙しい年の暮にも、私たちは、静かに私たちを見つめて、何かより多く理想を求めて、大正十年を迎えたいと思います。

巻頭の叫び

□ 「時間を無駄に使つてはならない。」 極めてわかりきつた問題です。わかりきつた問題なるが故に、私たちは平気で時間を棄てています。来る日来る日、万人平等に与えられるものは時間です。「一時間に入れる中身」それが、私たちの一生の決定です。「他人の仕事だ。今遊ぶに限る。」その心即ち私一生の墮落です。「人間には休息もいるものだ」と言いわけしつつ、今日そして明日、呑気に遊ぶその心は、人に千里の遅れを取る最良の方法です。朝の遅い大工、休憩の長い左官、暗い内に戸の明かない店、遅刻する生徒、化粧に手間どる女、信用の出来ない人たちです。

□ 人の処で用事のないのに長居して、時間を空費さすことは、借りた金を取つて返さないより悪いことです。六十人の集合に一時間遅れたら、六十時間の損をかけます。人の時間を盗むことは罪悪です。

□ 継続は最大な力です。子供の雑記帳一冊見たらその子の将来はほぼわかります。一枚の粗末もなく終始使つた帳面の持主は、切つたりぬかしたりしている優等児よりもずっと見込みがあります。一日に五十字おぼえることを三日するよりは、一日に一字づつ三百六十五日続けることは出来ないことです。一時の感奮は誰でもします。ただ継続する者は成功の彼岸に達し、途中で廃する者は凡人でおわる。継続は力です。千里の道も、怠らざる牛によつて生まれ、小山の徒競走の優勝は短かい足の亀に取られる。あなたが今年一月二月思いたつた仕事で何が続けられていますか。それによつてあなた自身の価値をお知りなさい。朝に思い立って、夕べに消える様では、あなたの一生はお気毒でも何も出来ない一生でしょう。「継続は力なり」高く叫んで新年をお待ちなさい。

煩惱即菩提 (生死即涅槃)

目覚めよ！ 然らば即ちこの世は極楽なり。

目覚めよ！ 然らば即ち汝は絶対（仏神）なり。

□ 私たちは人間だ。誠に愛と嫉みとうれしきと苦しきをもつて生きねばならぬ人間だ。あゝ嫌だ、と言つてもこの世は限りなく懐しい。生きていることがこの上なくうれしい。辛いのに苦ししいのに、それでも、今日、今日が私のために与えられていることに安心して、「生きている。今生きている」ということに、この上ない力強さを感ずる。そうだ。私たちは生きねばならぬのだ。私たちには、まだ知ったことのない死が、何時与えられるかも知らない。けれどそれすら、死、それすら、あまりに考えている暇がない。

「死んだら何もなくなる。家も親も愛する人も、何もなくなる。死は最後だ。」ということを考えることは、あまりに大きなことだ。もしそれを真剣に考えたら、私たちは何もしたくないだろう。生きていることさえ嫌になるだろう。有難いことには、私たちは、真実のところそんなにまで死を怖れていない。死を考えることよりも生きていることがなつかしい。私たちは死にたくない。どうしても生きたい。今日一日この確かな私の生命のささやきを聞いて、もつともつと、生きていたい。

そして、私の生命を育てたい。私は成長したい。私の内にある全てのものを力一ぱい育てたい。私は一丈の高さになるものか。百貫目になるものか。まだ知らないことだけれど、知らない私の生命の力を見たい。永遠に育てたいことだ。死など考えたくない。死などない。死など考えたって、私たちにはわからない。まだ見ない世界だ、経験のないことだ。それよりも私は、私人間として、生きていくことにこの上もない驚異と、感謝を思う。私は、私を育てたい。

□ 生命を育てると言えば、わからないというおぼあきんがあるだろう。難しいことではない。杉苗の様に私の心がのびて行くことだ。

自動車を見ても、驚異を感じた工家の坊ちゃん、毎日毎日唐紙と言わず、本と言わず、柱と言わず、手当たり次第に自動車の絵をかく。新しい芽は目に見える様子のびているのだ。私は、さわらずにおきたい。風にあてないようにして、そのまま正しく育てたい。その真摯な遊戯の中には、将来のラファエルの絵があるかもしれない。ロダンの様な芸術があるかも、ニュートンの様な発明があるかも知れない。

全ての人の子の生命は皆それだ。その生命は何を有するかわからない。けれども人間は、自分をもつともつと、何かで大きくしたいのだ。自分を育てたいのだ。それが私たちの根本だ。

□ 「私たちを成長させたい。」それは欲だ。（煩惱だ。）私たちのしていることは皆な欲だ。（欲はいわゆる、利己主義ではない。）人間のしていることは、私を育てたいという欲が根本なのだ。人間のしていることには、随分と自分を育てることから遠ざ

かつたことが多い。けれども、それは、方便に方便がついて、末に走って、本を失つたのだ。例えば、私たちは、児童の体育を向上させたい。そのために優勝旗を造って児童を奨励する。児童体育を進めることが目的だったけれども、いざ実行となると、体育よりも、勝って優勝旗を得るといふことに、目的が移ってしまう。そして、それを得るためには、技巧に走り、時には、はかりごと権謀さえ用うる。

ちようどそれと同じように、私たちは私を育てたい。そして、私は、私を育てることによつて、満足があり、生きる幸福を感じる。そして又、国家のお役に立つ、社会のためになる。私を育てるためには金がある。金がない。働いて取れ。それでは急に出来ない。つい盗む者が出来る。人間のあさはかな近道だ。浅知恵だ。金を得るために働いている時にさえ、私を育てていることを知らないのだ。そうだ、つまり、私たちの生命は育てなくてはならないものなのだ。

□ 私たちは、生きんがために限りない欲望をもつ。果しない望みを持つ。私が生れて、呼吸を一つしてから、母の乳房をくわえてから、私たちは、来る日来る日、欲の連続だ。私たちは、食いたい、着たい、愛したい、知りたい、見たい、聞きたい、美しく住みたい、泣きたい。それで今日まで続けて来た。私たちから、欲を去つたら後に何が残るだろうか。欲を去つたら、私は呼吸をしている人形だろう。欲は人間の本質だ。

私たちは、知りたい、何でも知りたい。それで人だ。

私たちは親を信ずる、そして、親を愛したい。子供を愛する。兄弟、国民、そして、4 全てを愛する。けれども、愛する者が裏切つた時、言い様のない寂しさを感じる。そして嫉妬する、嫉妬は愛を知る者の必ず持つ感情だ。出すと出さないとのがいばかりだ。私たちには嫉妬の心さえおこさないわけには行かない。それで人だ。

私たちは生きたい。智者も生きたい。救われた人も生きたい。真に正しく生きたい時には、自分自身を殺してさえ、生命に生きる。それで人だ。

□ 「死にたくない。」そして数限りのない欲望をもつ。「それがほんとの人間だ。「死にたい。」そして欲がない。」そんな人間はない。人間だという証拠には、生命全部が欲望であることだ。「欲をはなれました。山の木など少しくらい取つたとて、何ともない。小作米などちようど都合のよいほど持つて来いと言っています。」と言つたある老人は、「そうしておけば、死んだ時、焼いた時、せめて、悪口だけは言つてくれまい」とつけくわえた。所詮！物欲をはなれたら、名誉の欲が出て来ている。

私たちは欲が悪いと思つてはならない。否、欲は多いのが本当の人間だ。益々高尙な偉大な欲望をもたねばならぬ。よしそれが罪であろうと、煩惱であろうと、欲は私たちの心の全部である。私たちは人間に生みつけられて、動かない宇宙間唯一の確かさと、明かさをもつて、私が今私一人の世界を持つていることを知つている。私にとつては、今のこの私、欲望にみちたこの私を忠実に育てるより外ない。私は、この生きたい、愛したい、見たい、食いたい等という欲望をみんな投げ捨て、死を旅行の

様に考えることが、もし悟りであったり、救いであるなら、救われなくてもいいと思う、悟らなくてもいいと思う。

私はそんなものが欲しくない。唯、私はこの私に与えられた、その世界、私自身の内的生活―よしそれが罪でも煩惱でも―その真唯中に見出される救い、私がより高く、より美しく生きることに関与し救い、生命を育てることに合致する救いでなければならぬ。私は、灰身滅智の精神苦行や、高野山への隠遁などよりも、私の愛する兄弟たちに一滴の涙を注ぐ生活の方が有難い。

□ こんなことを考えると、限りなく親鸞が懐しい。そこだ、そこだ、と言ってくれ様な気がする。

□ 隣人の生活が豊かな時、他人が幸の時、それすら共に喜び得ないで悪魔の様に呪った女が、嫁の小さい過一つゆるし得ないで、若い嫁を瘠らせた姑が、一時間たかない内に、仏の前で極楽参り（何という利己主義だろう）を願ったり、山境をせるために使った鎌を腰から外して、すぐ仏の前で御誠悔文を唱え得るまでに信仰を墮落せしめた旧い人たちよ。御結構ですね。安価な信心ですね。

□ 皆様が、日曜に教会に集って美しく讚美歌を歌ったり、お祈りなさるところは、きれいですね。けれど、禁酒禁煙や、慈善鍋ばかりが皆様の御仕事でしょうか。それも結構です。けれども、皆様は、天父のおぼしめしにかなっていますか。神の子の自覚がありますか。「独りで祈って」神様と感応が出来ますか。

□ 私は、けれどこんな生活を知っている。愛する夫が病気になった。家には日一日と田がへり、山がへり、もう、食うにも困る。夫の病気は肺病だった。一生の愛を捧げた可憐の妻は、運命を呪わなかった。そして、不治の重患に苦しむ夫にやはりキッスを与えることが出来たその生活。

□ 最愛の妻を失い、子に死なれ、不幸な運命の悪戯によく精神の平和を得て、やはり感謝し得たその生活。

□ 死の間際まで、妻、子供、下女、書生、看護婦たちまでを、感謝と、慰めと、愛とで、感泣しめたある富豪の生活。

□ 病気のために、全身不随になって、二十年来寝ていながら、全てを運命にまかせ、生命の歓喜をもつて、人を救いつつある女の生活。

□ そんな生活は、私たちの内にわき出した、生きんがために求めた信仰の上に出てあがった偉大な生活です。

人生は信仰だ。

今平気でいるが、今すぐ驚天動地の大事件がおこるかも知れない。私たちが孤独な時、厳粛な時、私たちが及ぶかぎりの出来事を想像する時、身の毛のよだつ様な気がする。私たちは、平気でいたい。動揺し易い私の心に中心点がほしい。私は私であつて、私のままのその中に動かないものを見出したい。私たちの信仰生活を確立するのだ。目覚める、救われるとは、私の内に宿る力、私を育てる、私を真に育ててくれる力を見出すのだ。腐り果てた肉や魂の中にさえ、動かない倒れない真実の力を、光明を認め仰ぐのだ。

私たちの周囲が鬼と見え、敵と見え、私を傷つけ、私に怒りと呪いとをのみ送る様に見える私の生活を、私を生かし、私の生命を育ててくれる方便力と見たい。

私たちの周囲は、出来ては消え、消えては出来る無常の相と見ゆれど、その中に、永劫変らぬ常恒不変の一貫の生命を知りたい。私の生命と、その生命とが、抱きつきたい。そして、私の永遠に生き得る生命を育てたい。

□ 信仰は、死んだ後、金銀瑪瑙でかためた極楽や花降る天国に一足とびに行くことよりは、如何にして生き得るか、今の私にとつて切実な要求です。未来なんか、「総じてもて存知せざるところなり。」です。死後なんか私の役目ではない。私には唯、生きる事が与えられているばかりだ。私たちが真実に生きんとするとき、私たちのその中にほんとの光明は見出される。

□ 信仰は私たちの人間としての生活を否定するのではない。欲をはなれるのではない。私たちは欲でかたまっている―儒者は煩惱だと言う―それでいいのだ。私たちのほんとの欲（第一義的欲）を満足して行くのだ。欲が罪惡なら、私たちは地獄にでも餓鬼道にでもゆくより外ない。

方法は何でもいい。私たちの生活には信仰がほしい。否、なくてはならぬ。信仰のないために、人間は野良犬の様にキョロキョロしている。右の者が、「あなたは悪い」と言えばびつくりする。左の者が「よい」と言えば急に賢くなる。他人の顔色や、言葉や、裁判で、毎日七面鳥の様に自分の顔色をかえて暮していることは、何という無意義な生活でしょう。

私たちが真実に人を愛しようとしても、信仰がなくては出来ないことです。支那の聖人は、「君子は李下に冠を正さず、瓜田に杵を入れず」と言いました。けれども私たちは、李を盗んだとか、瓜を取ったとかの疑いは受けても、人を愛しなければならぬ時があります。

万人の疑いは受けても悲しき者のために祈る強い愛はどこから出るのでしょうか。万人が悪いと裁きをつけても、私には寂しい辛いことがあります。私たちのほんとの道はそこにあると思います。善くても悪くてもいい、私はただ、神様の仏様の思し召しやお裁きのみを聞いていれればいいのだ。言いかえれば、私の心の内にのみ、信じればいいのだ。それで全てを満足したい。ほんとの裁きは神から受ける。仏がする。

□ 私たちは、私たちが人間であることに気がついて、真実の生活に進む時、私は苦しみます。悩みます。けれど、私たちは、その悩みの中にこそ、燦然と輝く光明を認めることが出来ましょう。一貫の生命は、偉大な生命に感応し、絶対の愛に抱かれることが出来るでしょう。私たちの美しい希望を、死も生も超越して、永遠に持つて行くことが出来るでしょう。そして、私たちは、唯これのみ私の生命として、来る日来る日を私の生きるために、一分をあせつて使うこと、私たちが美を賞翫^{しょうがん}し、私たちの生を楽しむことが、その生命と一致することを見出すでしょう。

かくして、私たちに与えられるものは、感謝です。生き得る力です。

うとそうそう
烏兔早々

大正九年も余すところ僅かになりました。何というあわただしきでしょう。忙しい私たち、仕事のある私たち、私の内部に充実させたい私たちには、殊更に年の逝くのが感ぜられます。私たちはいたずらに過去を思いわずらってはいけないと思います。過去一年の間には随分と面白くなかったことも失敗もあるものです。年末は、その総勘定をして、いけないことは葬つて忘れてしまふところにも、年の暮れの意義はあると思います。

私たちが新年を迎えることの第一の意義は、生活を新しくすることにある。全ての計画を新しく立てかえたり、これまでの生活を一層向上させたり、来年はと待つていて、若水で顔を洗つて、新しい気分で、新しい元気で、又人生の奮闘に出発することなど、若い活動しようとする者には、うれしい時だと思えます。

面白くないことや失敗などは、今年の内忘れて、せめて新しい元旦には一家揃つて、笑顔の内に鶏の歌を聞きたいと思えます。

一年の計ごとは、元旦に立てては遅い、本年の内立てておくのです。そして、新年には、直ちに実行に取りかかるのです。私は、そろそろ本年の回顧文を書き残して、新年の計画を立てます。そして、大正十年一ケ年が私の一生を支配することを考えて、元旦からすぐ、私の生活の充実に突入したいと思つています。皆様の御幸福を祈りつつ筆を擱きます。お風邪召さない様に。さよなら。(二十日夜)